

震災遺構で活動するガイドの語りと実践 —岩手県宮古市田老「学ぶ防災」を事例に—

16H2087 田中 奎太郎

1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地では、発災直後から、震災の脅威や教訓を伝承するとともに、地域の観光振興の一助となりうる方策として、震災遺構¹の保全が関心を集めてきた(石本・安武:2019)。震災遺構の見学と語り部²による講話を組み合わせ、語り部の案内で震災前後の景観変化を体感しながら町を歩く震災学習プログラムが各地でつくられ、地域の内外から参加者を集めている。

本研究で取り上げる岩手県宮古市田老地区(旧田老町)の「学ぶ防災」³は、宮古観光文化交流協会(以下、観光協会と表記)が2012年4月からはじめた震災学習プログラムである。田老地区に散在する震災遺構をめぐりながら、地震と津波の防災について学ぶ。その道中の案内者が、自身の被災経験を伝える語り部ではなく、様々な情報を選びすぐって提供するガイドとして、自らを位置付けている点が特徴である。田老地区出身のガイド1人と、田老地区ではないが宮古市出身のガイド4人が活動している。「学ぶ防災」では、地元の小学校などにおける防災教育の一端を担うとともに、県外から来る修学旅行生や観光客、震災復興や防災に携わる行政職員や研究者まで、広く参加者を受け入れている。

岩手県内では、「学ぶ防災」の他にも、「未来へ語り継ぐ陸前高田」や「釜石観光ボランティアガイド会」などの震災学習プログラムが2012年から現在まで続いている。そこでは、「学ぶ防災」とは異なり、プログラムの担い手が語り部として位置づけられている。3つのプログラムの参加者数の推移を比較すると、「学ぶ防災」では、2013年度に3万人を超え、その後やや減少したものの、2015年度以降も常に年間2万人程度を維持している⁴。これに対して、未来へ語り継ぐ陸前高田では、2014年度の3万人強をピークにその後は減少し続け、2018年度は1万人を下回った⁵。また、釜石観光ボランティアガイド会でも、2012年度から2015年度までは毎年1万3千人前後であったが、2016年度以降は7千人程度とほぼ半減した⁶。他の震災学習プログラムの参加者数が急減しているなかで、「学ぶ防災」の参加者数の推移は目を見張るものがある。

そこで本研究では、語り部ではないガイドのあり方に着目して、「学ぶ防災」で提供される学習内容、すなわち震災遺構に関するガイドの説明の特徴を明らかにする。また、「学ぶ防災」がどのようなプロセスを経て地域に定着してきたのか、その過程でガイドと参加者、

¹ 地震や津波で破壊された建物、地震で生じた断層や土砂崩れなど、震災の被害を受けた建造物や自然物で、震災の記憶や教訓を後世に伝える証しとして保存されるもの。慰霊や防災教育の拠点にもなる。

² 災害の脅威や教訓を伝承することを目的として、被災者が自身の体験や教訓を語る活動。

³ 2005年に旧宮古市と旧田老町、旧新里村が合併して現在の宮古市になった。宮古市田老地区(旧田老町)では、2011年の東日本大震災の際に30メートルを超える津波に襲われ、宮古市のなかでも特に甚大な被害を受けたことから、震災後、独自の防災学習プログラムがつけられた。

⁴ 宮古市役所に保管された利用実績一覧票より筆者算出

⁵ 陸前高田市観光物産協会に保管された利用実績一覧票より筆者算出

⁶ 釜石市役所に保管された利用実績一覧票より筆者算出

地域住民の間にどのような関係が構築されてきたのかを分析する。これらを通して、「学ぶ防災」の意義と、それが参加者を惹き付け続ける要因について検討することを目的とする。

2. 研究方法と対象

本研究では、文献調査と参与観察、インタビュー調査をおこなった。文献調査では、被災地における観光をめぐる議論を把握した。参与観察では、「学ぶ防災」のプログラムに同行して、ガイドが説明をおこなう場所や、話の内容について分析した。

インタビュー調査は、ガイド5人を中心に、「学ぶ防災」の関係者10人を対象として実施した。5人のガイドは、ガイド活動を始めた時期が早い順に、ガイドAさんからガイドEさんと表記する。5人の出身地、性別、ガイド活動を開始した時期を、表1にまとめた。ガイドAさんからガイドDさんまでの4人は宮古市の田老以外の地区出身（以下では、宮古市出身と表記）、ガイドEさんは田老地区出身である。

表1 「学ぶ防災」で活動するガイドの属性

	ガイドAさん	ガイドBさん	ガイドCさん	ガイドDさん	ガイドEさん
性別	女性	女性	男性	男性	男性
出身地	宮古市	宮古市	宮古市	宮古市	田老
活動を開始した時期	2012年2月	2012年3月	2012年4月	2013年5月	2014年2月

注：ガイドAさんとBさんは、「学ぶ防災」が参加者を受け入れはじめる2012年4月よりも前に活動を開始しており、当初はプログラムの準備に携わっていた。

インタビューの内容は次の3点である。1つ目は、ガイド5人に対して活動をはじめた経緯や現在までの活動経験、参加者や住民との関わり方などを聞いた。2つ目は、「学ぶ防災」開始当初の観光協会事務局長Fさんら、関係者3人に対して、「学ぶ防災」が始まった経緯を聞いた。3つ目は、日頃から「学ぶ防災」の活動を目の当たりにしている田老の元消防団長Gさんら、住民2人に対して、ガイドや観光客との関係について聞いた。

3. 「学ぶ防災」のガイド内容を支える多方面への情報収集

ガイド内容を分析した結果、「学ぶ防災」では、ガイドの出身地によって話の内容や、もともとなる情報の集め方に違いがみられた。表2と表3は、それぞれ田老出身のガイドEさんの情報ソースと、宮古市出身のガイドAさんの情報ソースを示している。分析にあたっては、双方が案内するプログラムに参加・同行し、伝聞に基づくガイド内容を抽出した後、その情報をどこから得たのか聞き取った。

3-1. 田老出身ガイドEさんの場合 —地元ネットワーク+ガイド同士の情報共有—

ガイドEさんは田老出身で、震災前から田老の住民と関わりがあることから、彼のガイド内容にも住民との会話が数多く反映されている。例えば表2の番号5は、地震発生時に防潮堤に登って津波の写真を撮影していた住民らが、津波にのまれて命を落としたというエピソードだ。犠牲者のひとりがEさんの知人であったことから、震災後、人づてにその人が亡くなった経緯を聞くことがあったという。

Eさんはまた、自身もつ地元のネットワークから得た情報だけでなく、ガイド仲間か

ら聞いた地元のエピソードも積極的に活用している。例えば表2の番号3は、地震発生時、田老第一中学校の生徒が、高台にある避難場所まで続く斜面に点々と並び、バケツリレーのようにして児童館の子供たちを運んだというエピソードである。Eさんは、このエピソードを同僚のガイドAさんから聞いて以来、自身のガイド内容に取り入れているという。「学ぶ防災」の事務所では、こうしたガイド同士の会話によって、ガイドに用いる情報の共有がすすんでいるようだ。

表2 ガイドEさんの情報ソース

番号	話す内容	ガイドする場所	入手方法
1	防潮堤が作られた経緯（村長の高台移転の決断・技師による防潮堤の建設）	防潮堤	本
2	それぞれの防潮堤が作られた年数などの情報	防潮堤	本
3	地震発生時、中学生が児童館の生徒をバケツリレーで運んだ	防潮堤	ガイドAさんとの会話
4	地震発生時、位牌を取りに戻った人がいた	防潮堤	住民
5	地震発生時、カメラを撮影していた人がいた	防潮堤	住民
6	明治・昭和など過去の津波の被害（死亡者数や波の高さなど）	防潮堤	本（作者：山下文男）
7	東日本大震災で津波がどこまで到達したか（小学校、中学校、お寺など）	防潮堤	住民
8	赤沼山の避難場所が44箇所あった	防潮堤	他のガイドとの会話
9	避難場所をつなげ、家族が会いやすいようになっていた	防潮堤	他のガイドとの会話
10	近くに住んでいた人が大船渡まで流されていた	防潮堤	住民
11	漁協の方が地震発生時に写真を撮った	防潮堤	パンフレット、他のガイドとの会話

3-2. 宮古市出身ガイドAさんの場合 —住民に聞き取り＋参加者からも情報収集—

宮古市出身のガイドAさんは、「学ぶ防災」のプログラム準備期間から活動しており、その当初、ガイド活動の参考にするため、観光協会事務局長FさんやガイドBさんらとともに、田老の住民に被災体験を聞いて歩いたという。Aさんらは、集めた情報を互いに共有するとともに、後から活動をはじめたガイドにも積極的に伝えている。たとえば前節で述べたバケツリレーのエピソードは、当時、別のガイドHさん（田老出身、現在は活動を辞めている）が聞いてきた話をAさんも共有し、数年後、ガイドになったEさんに対してAさんが教えた。

Aさんはもう一つ、興味深い方法で情報を収集している。それは、「学ぶ防災」の参加者に質問することだ。ガイドをする際に、自身が説明するだけでなく、参加者に対して質問し、そこで得た情報をその後のガイド内容に反映させている。津波避難タワーの設計者や、阪神淡路大震災を経験した消防士などの専門家に質問した時のことを振り返って、Aさんは次のように語っている。「(案内しながら) 逆に聞き出した方がいいなって思って。私が逆に知りたくて、そしてそれが、自分の知識になって色々な人に教えられる」。こうして得た専門知識を反映したガイド内容は、表3の番号1や番号8である。例えば番号1は、第2・第3防潮堤が壊されたことで、新たに高さ14.7mの防潮堤が作られることになったが、その高さは入江の形や入ってくる水の量を計算して導き出されたというものだ。

Aさんが質問する相手は、専門家に限らず、一般の小学生にまで広がっている。それが反映されたガイド内容は、表3の番号11や番号16だ。小学生が避難するときどのようなことを考えて行動するのかを聞きだし、ガイド内容に盛り込むことで、大人の参加者も、子供のための防災を具体的に考えられるようになっている。

表3 ガイドAさんの情報ソース

番号	話す内容	ガイドする場所	入手方法
1	新しい防潮堤が14.7メートルになった経緯	防潮堤	専門家
2	田老の名前の由来（田が老いる）	防潮堤	過去にガイドAさんがバスガイドをしていた時に聞いた
3	昭和8年の後の田老の復興の様子（防潮堤の建設など）	防潮堤	元NPO宮古市田老代表からもらった資料
4	防潮堤の内側の作り（鉄筋でできているなど）	防潮堤	防潮堤が壊れたことで明らかになった
5	赤沼山の避難場所が44箇所あった	防潮堤	資料
6	避難場所をつなげ、家族が会いやすくなった	防潮堤	元田老出身ガイドH、元NPO宮古市田老代表
7	地震発生時、中学生が児童館の生徒をバケツリレーで運んだ	防潮堤	元田老出身ガイドH
8	製氷施設でのALCなどの専門知識	製氷施設	参加した専門家（避難タワーの設計者）
9	漁師の船が流された（漁師の方が海に裏切られたと言った）	製氷施設	田老の漁師、元田老出身ガイドH
10	松本オーナーの震災の体験	たろう観光ホテル	オーナーFさん
11	小学生に聞いた「一人の時と大勢で逃げる時、どっちが早く避難するか」	たろう観光ホテル	参加した小学生
12	住民の知り合いが被災された話	たろう観光ホテル	同僚経由
13	地震発生時に家に集まってお茶を飲んでいた方の話	たろう観光ホテル	元田老出身ガイド
14	「避難する時に先頭に早い人を置く」	たろう観光ホテル	東京大学の先生からもらった本
15	専門家の方から聞いたエキスパートエラー	たろう観光ホテル	中学校の先生
16	靴を揃える話をする際の子供の話	たろう観光ホテル	参加者の小学生
17	消防の人から聞いた笛とペンライトを持ち歩くべきだと勧められた話	たろう観光ホテル	消防団の元団長である住民Gさん

4. 「学ぶ防災」の活動をめぐるガイドと住民の関係

聞き取り調査の結果、「学ぶ防災」が開始された当初と、そこから7年が経過した現在では、「学ぶ防災」をめぐってガイドと住民の関係に変化が生じていることが明らかとなった。以下では、「学ぶ防災」が開始された当初の住民の態度、ガイドによる住民への働きかけ、その結果、住民にあらわれたガイドへの対応の変化の順に述べる。

4-1. 「学ぶ防災」が開始された当初の住民からの不満

「学ぶ防災」がはじまった当初は、ガイドや参加者に対して不満を抱く住民がかなりいたようだ。最大の不満は、ガイドは田老で震災を経験していない「よそ者」だ、というものである。その背景には、2005年におこなわれた市町村合併がある。当時の田老町、宮古市、新里村が合併して現在の宮古市となったが、今でも、田老と、それ以外の宮古市の地区を区別して考える住民は多い。ガイドBさんによれば、一部の住民はガイドと話す際に、「俺は田老の人間」、「あなたたち(ガイド)は宮古市の人間」と区別していたという。また、観光客を防潮堤に案内していたBさんに対して、「田老でねえくせに何語ってんだ」「嘘語ってんじゃねーよ」と批判する人もいたという。

もう一つの不満は、参加者による観光公害だ。「学ぶ防災」が始まった当初、周辺環境整備が十分でなかったため、屋外で用を足したり、タバコの吸い殻をポイ捨てするなど、被災地への配慮に欠けた行動をする参加者がいた。このような行動があったことで、参加者を先導するガイドも批判された。ただし現在は、たろう観光ホテルの駐車場や、道の駅たろう（「学ぶ防災」の事務所がある）など、ガイド中に案内する場所にトイレやゴミ箱が設置されたことで、参加者のマナーは改善されている。

4-2. ガイドによる働きかけ

前節で述べたような住民からの不満があるなかで、ガイドたちは「学ぶ防災」の活動を理解し認めてもらうため、住民に働きかけていった。例えばガイドAさんは、住民に積極

的に話しかけ、「学ぶ防災」の活動内容や、自分がどのような思いで活動に取り組んでいるかを伝えたという。ガイドBさんは、「学ぶ防災」の参加者に田老特産のワカメを販売するなど、ガイドは住民とともに、被災した田老が元気になるように行動してきたと、胸を張って語る。また、ガイドCさんは当時を振り返り、住民の批判が聞こえてきたことで、かえって、嘘を語らない心がけや、田老の代表として活動する自覚が芽生えたと語る。

このような働きかけを続けた結果、住民のなかにも、自らの震災の体験を語るために「学ぶ防災」の事務所を訪れる人が多くなったという。また、『学ぶ防災』のコースに桜の木を植えたらいいんじゃないか など、住民から活動への助言も寄せられるようになった。

4-3. 住民からの応答

「学ぶ防災」が開始されてから、ガイドが積極的に住民へ働きかけてきたことで、互いの関係に変化が見られた。それを象徴する出来事は、ガイドが地域の新年会に招待されるようになったことだ。田老では毎年正月に、住民らが集まって新年会をおこなう。2012年4月に「学ぶ防災」が始まってから、2017年になって初めて、ガイドも新年会に招待されるようになり、それ以来、毎年参加しているという。こうした変化について、ガイドBさんは、田老の活性化に貢献する自分たちの姿勢が住民に伝わって、「よそ者」扱いが解けていったのだろうと語る。

住民の立場から見るとどうだったのか、田老の元消防団長Gさんに聞いた。当初、田老の住民の多くは、宮古出身のガイドが田老を案内することに不信感を抱いていたが、徐々に、住民の中から「ガイドと住民が話し合うことも必要」、「ガイドが違うこと（間違ったこと）を話しているのならば、教えてあげたい」といった声が出るようになり、ガイドを新年会に招くようになったという。Gさんは、新年会にガイドが参加し、ガイドと住民の交流する機会が増えれば、ガイドに対する不信感の払拭につながると期待している。

5. 考察

5-1. 「語り部ではないガイド」の特徴と意義

語り部の活動が、自身の被災体験を語ることで、参加者に災害の怖さを知ってもらうことを目的としているのに対して、「学ぶ防災」は、単にガイドの被災体験を語るだけに留まらない。そこで語られる内容は、ガイド自身の被災体験に加えて、住民から聞いた震災当時の状況、そこからの教訓や防災の知識、古くから津波災害に悩まされてきた田老の歴史、そして東日本大震災後の復興状況や、今後の津波対策とまちづくりの進捗、それへの住民の反応など、多岐にわたる。そのため、「学ぶ防災」は、災害時に自分はどう行動するべきかといった個人の視点に加えて、多様な人が暮らすなかで、災害に備えてどのような地域をつくっていくべきか、といった社会の視点からも防災を考える契機となる。5人のガイドがそれぞれ独自に内容を組み立てて、「学ぶ防災」のプログラム全体に多様性が生じていることも、そうした効果を促進している。多元的で重層的な社会の実態に即した防災教育として機能しているからこそ、「学ぶ防災」は現在も多くの参加者を集めているのだと考えられる。

阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話を分析した高野・渥美(2007)は、語り部の講話のなかで、公的な震災のストーリーと私的な体験との間のズレが露呈する事態を「対話

の綻び」と定義し、それを経験した聞き手は、「震災が自分にも起こりうる」という偶有性を喚起されるとともに、その話題を第三者へ伝える際により鮮明に、より具体的に伝える可能性がある」と指摘する。そして、講話の現場に立ち合い、対話の綻びが生じた際に解説を加える「媒介者」を導入することで、語りの偶有性を高め、聞き手から第三者への伝承の連鎖を促進することができると提案する(高野・渥美：2007)。

「学ぶ防災」の現場を振り返れば、ガイドは住民から聞いた震災の体験談を基に、解説を加えながら震災遺構を案内している。すなわち、「学ぶ防災」においては、ガイドが「よそ者」であるがゆえに「媒介者」として機能しており、震災の教訓が参加者からより多くの人へと伝承されると期待できる。そして、田老出身のガイドと宮古市出身のガイドが、それぞれ住民や専門家から聞いたエピソードを積極的に共有しあうことで、互いに媒介者として機能し、「学ぶ防災」の伝承する力を強めている可能性も指摘しておきたい。

5-2. 地域に根付く「学ぶ防災」

4章で述べたように、「学ぶ防災」は、開始当初には住民から反発も受けたが、ガイドの働きかけにともなって、徐々に受け入れられていった。「学ぶ防災」の活動が7年に渡って盛り上がりを持している背景には、ガイドと住民が歩み寄り、互いに支援する関係を構築していったプロセスがあった。

復興応援バスツアーを事例に被災地での観光のあり方を検討した工藤(2015)は、観光が被災地に経済的利益をもたらすことを歓迎しつつも、観光客の増加にともなって、地域住民への配慮に欠ける言動や迷惑行為といった観光公害も見られるようになったと指摘する。そうした観光客によって被災地が「消費される」事態を回避する手段として、工藤は、地域住民と観光客、観光業従事者とを結びつける必要性を説く。震災の爪痕だけでなく、住民目線の地域の魅力も併せて発信していくことで、住民も観光客も被災地への愛着が深まり、自ずと被災地が「消費される」ようことはなくなると論じている。

「学ぶ防災」でも、住民とガイドが歩み寄るなかで、両者が協働して特産品を販売するなど、地域の魅力を発信してきた。そして現在では、住民の側からガイドに対して、田老の復興や今後の防災について話し合う、まちづくり協議会に参加してほしいと期待されるまでになっている。まちづくり協議会への参加を通じて、ガイドと住民がともに「学ぶ防災」の企画について考え、工藤が指摘したような、住民や観光客の田老への愛着を深める仕掛けを盛り込んでいけば、「学ぶ防災」を通じた田老の観光振興は、より良い方向にすすんでいくと考える。

参考・引用文献、URL

石本隆之介・安武敦子(2019)「わが国における災害遺構の保存に関する研究 ―東日本大震災の事例から―」『長崎大学大学院工学研究科研究報告』49(93), pp. 22-27.

工藤純也(2015)「復興応援バスツアーにみる被災地での観光のあり方に関する考察 ―消費される観光地」を回避するためには―」『総合政策』17(1), pp. 1-19.

高野尚子・渥美公秀(2007)「阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察 ―対話の綻びをめぐる―」『実験社会心理学研究』46(2), pp. 185-197.